

## ブラントームへの献辞<sup>①</sup>

わたしをこんなに褒めていなければ、あなたの作品<sup>②</sup>をもっと称賛するでしょうに。わたしがあなたの作品を称賛するのは理性よりもむしろ自愛のせいだと言われたくはありませんし、テミストクレス<sup>③</sup>のように、わたしを最も褒める人が一番いいことを言うとなつたと思うと考えて貰いたくありませんから。称賛に値しないのに、称賛を好むのは女性に共通する悪徳です。わたしは女性をこの点で非難しますし、この状態に留まりたくありません。しかしながら、わたしはあなたのような立派な方がこれほど豊富な筆でわたしを描きたいと思われたのを大変光榮に存じます。この肖像で、絵の装飾は、あなたが主題とされたかった人物像の素晴らしさを遥かに越えています。わたしのものとされたものの幾分かでも持っていたとしても、不幸のため、外部から消えてしまい、わたしの回想録からも消えました。それで、あなたの『貴顕婦人伝』を注意深く見て、わたしは老いたランダン夫人<sup>④</sup>のように進んでするでしょう。夫人は、夫の死以来、鏡を見ずにきて、たまたま他の人の鏡で自分の姿に出会い、これは誰かしら、と言ったのです。友はわたしを見て反対のことを説得しようとするでしょうが、目が余り

の愛着に幻惑されているので、わたしはこの人たちの判断は疑わしいと見なします。あなたがわたしに会いに来たら、その点でわたしの側について、しばしばわたしが書くように、デュ・ペレーの詩句によって、「それはローマでローマを探すことだが、ローマにはローマは何も見出されない<sup>③</sup>」と言われると思います。

しかしトロイアの破壊、アテナイと、遺跡がとても小さくほとんどどこにあつたか見分けられないけれど、栄えていたときあれほど強力であつた都市の偉大さを読むのが好まれるように、そのように、あなたの書いたもの以外の痕跡も証言も残っていないけれども、素晴らしい美人を書き記すことは、あなたの氣にいます。あなたが自然と運命の対照を表現するためにそうされたのなら、これ以上すばらしい主題を選ぶことはできなかったでしょう。両者が競つてその力を振るおうと試みたのですから。自然のことについては、目撃者なのですから、あなたは教えてもらう必要はありません。しかし運命のことについては、報告（よく知らないあるいは悪い感情を抱いている人によってなされがちで、こうした人たちは無知あるいは悪意により事実を表現しないことがあります）によってだけ書き記すことができるのですから、より知ることのでき、この件の記述の眞実により関心のある者の思い出を喜んで受け取られると思います。わたしがそうするよう促されたのは、あなたの『貴顕婦人伝』にいくつか指摘する点があつたからで、あなたの『マルグリット篇』には誤りがあります。それはあなたが、ポー<sup>⑤</sup>について、わたしのフランスへの旅<sup>⑦</sup>について、故ビロン元帥<sup>⑧</sup>について、アジャン<sup>⑨</sup>について語るときであり、カニヤック侯爵<sup>⑩</sup>の当地からの出立について語るときでもあります。

わたしは自分の思い出を描きます。歴史という名に値しますが、より栄えあるこの名前は与えません。そこに含まれる眞実が生のまま何らの飾りもないからで、歴史が書けるとは思いませんし、また今はその暇もありません。それ故、昼食後のこの作品は、重く不恰好な固まりで、母熊がなめて形を整える小熊のようなものとしてあなたのものに行くでしょう。そしてそこで成長するでしょう。それは混沌ですが、あなたがすでにこの世の光に引き出しました。仕上げにはあと五、六日かかる作品として残されているのです。それは、名誉ある騎士、本当

のフランス人、名家に生まれ、わたしの父兄たちの王によって育てられ、わたしは幸福にもその仲間であった、わたしたちの時代の感じの良い誠実な夫人たちの親戚で親しい友である人<sup>①</sup>によって書かれる価値のある歴史です。

最初の思い出 マルグリット六歳の折 致命傷を負ったトゥルネル宮での馬上槍試合以前  
の父アンリ二世との親しい会話

出来事の前後関係からわたしは、シャルル王<sup>②</sup>の時代、わたしの生涯に何ほどか注目すべきことが起こったのを思い出しうる最初の時点から始めねばなりません。それ故、土地を記述する地理学者が、自分たちの知っている最果てに着いたとき、「これより先は砂漠、人の住まぬ地、未航海の海<sup>③</sup>だ」と言うように、同じく、それ以前は幼年期の空漠<sup>④</sup>しかない、とわたしも言うでしょうが、そこではわたしたちは理性によって支配管理された人間としてよりも、動植物のように、自然に導かれて生きています。そしてその時期にわたしを教え導いた人にこの余分な探索は任せますが、この子供の活動に、テミストクレスやアレクサンドロス大王の幼年期と同じように、書かれる価値のあることが見出されるかもしれません。前者は道の真ん中で荷車引きの馬の足下に身をさらし、荷車引きがやめるよう懇願するまでやめず、後者は王たちと争わないような競争の賞を得る栄誉は軽蔑していました<sup>⑤</sup>。

「二五五九年」

悲惨な一撃の何日か前に、故父王にわたしのなした返答はそうしたことのひとつかもしれません。その一撃はフランスから休息を、わたしたちの家から幸福を奪い去りました<sup>⑥</sup>。そのときわたしは四、五歳くらいでしかなかったのですが、王は、話をさせるためにわたしを膝に抱え、ジョワンヴィルの若殿（その後の、あの偉大で不幸なギーズ公爵<sup>⑦</sup>）あるいはラ・ロシュ・シュル・ヨン大公の息子のボープレオー侯爵<sup>⑧</sup>（この方の才気を、自然はとも素晴らしいものにして、運命の妬みを掻き立て、運命の宿敵とまでなし、その精神に輝いていた美德と寛大